

常陽新聞

発行所 常陽新聞社

シンナーにおぼれて人生を棒に振り、親やきょうだいを苦しめ続けた若者が、数奇な運命を象徴するかのような死に方で、この世を去った。彼は、全国各地のダルク(DARUK)＝薬物依存の民間回復施設)を転々とし、社会復帰を夢見ては挫折を繰り返した。施設内での呼び名(アノニマス・ネーム)は「ビート」。享年三十三歳。

世間からは理解しがたい短い生涯で、無駄死にと受け取られるかもしれないが、同じ薬物依存症の仲間たちにとっては重く、意味のある死だった。

カトリック教会はタルクの最大理解者で、資金面でも下支えしている。同教会も適度に「NA」と呼ばれる地域での自主ミーティング会場に一室を提供。一時期、ビートも足を運んだ思い出の場所だ。

葬儀は「ダルク葬」

タルクでは、入寮者親)が「こんなによくの仲間の皆さんに見送られ、息子は本当に幸せです」と述べた。言葉に悲しさはなく、わが子の死を深いところで受け止め、潔い落ち着きさえ感じさせられた。

シンナー依存症回復困難な現実

ダルク

数奇な運命象徴する死

「ビートの死が教えるもの」上

として生まれ、東北から沖縄まで全国のタルク関係者や家族会メンバーら百五十人以上が参列。賛美歌と神父による追悼の説教、会葬者全員が中央の祭壇の前にある遺影に献花し、約一時間ほどで終わった。

最後に、遺族(両親)が「こんなによくの仲間の皆さんに見送られ、息子は本当に幸せです」と述べた。言葉に悲しさはなく、わが子の死を深いところで受け止め、潔い落ち着きさえ感じさせられた。

とは、自分自身の体を傷つける自傷行為。よくメディアでは幻覚や幻聴で他人に危害を加えるケースが強調される。しかし、多くは自分の体と心を傷つけて罰を受ける奇妙な犯罪行動だ。

ビートの死も謎が多い。彼は東京タルクで、シンナー依存症者は、ほかの薬物に比べ、危険く、タルクにつながらなくてもトラブルメーカーを演じた。タルクに理解を寄せ、横浜市の定時制高校教師、水谷修さん(仮名)は「以前に比べ、タルクで死ぬケースは格段に減った。全国に回復施設が増え、それぞれに合った回復施設を選べるようになったから」と指摘する。

しかし、薬物依存症者には死が身近な現実であることに変わりはない。音楽が好きで、それを名前にしたビート。年齢は若者でも、精神年齢は十六、七歳の少年だった。せめて初期の段階でタルクにつながっていたら死を防げたかもしれない。



先月末、下館カトリック教会で営まれたビートのタルク葬。全国から百五十人を迎えた。

常陽新聞

発行所 常陽新聞社

今年一月半は、謎めいた死で四十三年の生涯を閉じたビート。薬物依存症者が例外なく演じるように、重症のシンナー依存者の彼も、家族を無間地獄の苦しみに引きずり込んだ。

そのいきさつは、ノンフィクション作家、軍司貞則氏の著書「麻薬脱出―(小学館刊)」に詳しい。タルク創始者の近藤恒夫氏と、茨城タルクの岩井喜代仁代表の半生を織り交ぜ、薬物依存症者を抱えた家族が背負う不幸が克明に描かれている。

同書によれば、両親がわが子(ビート)のシンナー乱用に気付いたのは一九七五年ごろ、高校受験を控えた時期だった。まだタルクはこの世になく、世間もシンナーへの関心は「シンナー遊び」程度だった。

当時、ビートの両親

は高度経済成長を底辺で支えるかのように、夫婦力を合わせて自動車修理工場を経営し、販売も手掛けるなど順調に事業を拡大。自宅を新築して、仕事に追われる両親を横目に、ビートはシンナー依存症を悪化させた。

彼は高校中退や暴走族入りと、お定まりのコースを歩み、その間に自殺未遂やバイク事故などのトラブルを繰り返しては、両親に「尻ぬべい」させた。

無間地獄に苦しんだ両親

タルク

依存症の根深さ体現

ビートの死が教えるもの―中

家庭内での暴力も日常となっていた。

すでにビートの生活はシンナーを中心に回っており、恋愛も成就するはずはなかった。

思い通りにならぬとシンナーに逃避し、酩酊(めいてい)して暴れた。気を引くためとしか思えない自殺未遂も繰り返した。

家の中では暴れ放題、外では自動車事故を起こすなど、シンナー依存症は悪化の一途をたどった。八〇年ごろ、世間でいう「シンナー中毒」を専門に扱う精神病院などなく、病院や警察では「もつと愛情をかけて」と言われ、両親は途方に暮

れた。

ビートが次々に引き起こすトラブルの後始末で出費がかさむ悪循環の中、仕事への影響や世間体への配慮を気

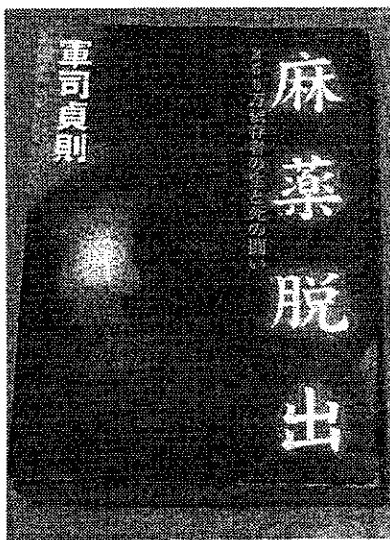
にしながら、両親は仕事に励むしかなかった。宗教にすがったりしたが、事態が好転することにはなかった。

曲折を経て、ビート

いつしかビートのシンナー依存歴も十年以上。二十八歳になった彼は結婚するが、シンナーが原因で破局。恐れていたアパート火災を引き起こすと、両親はビートを手にかけ

が東京タルクにつながったのは九四年、三十五歳になっていた。シンナー依存歴は二十年以上に及び、長期にわたる脳のダメージから、入寮者とのトラブルなどで回復の難しさが浮き彫りになった。

両親が安住の境地に入ったのも束の間、促されて参加した茨城タルクの家族会でカルチャーショックを受けた。「子供が薬物依存症なら、それを支える親たちも病气。親が変わらない限り、子供も変わらなぬ」ところ。



謎めいた死で43歳の生涯を閉じたビートの物語が描かれている軍司貞則さんの「麻薬脱出―250万依存者の生と死の闘い」

商売も、何もかも投げ打って避難し、わが子を兵糧攻めにして、やっと突き放した親もいた。総額一億円を費やした親もいた。振り返ると、二人も六千万円以上の金額をビートのために出費していた。地元では自警団的な動きも始れていた。岩井代表の「戻る家があるうちは回復しない」の助言で自覚めた。「会社も工場も手放し、家も壊して、息子を完全に突き放そう」。両親は決断し、実行した。

その後、両親は毎月開かれる茨城タルクの家族会には必ず参加した。息子との連絡を完全に絶ち、アパートで二人だけの暮らし初めて四年余りが経過した。そして今年一月半ば、ビートの訃報が届いた。

【訂正】上編でビートの享年は43歳でした。

常陽新聞

発行所 常陽新聞社

薬物依存症者には、それぞれ固有の薬物人生物話がある。半面、薬物の種類や使用期間、社会背景などで一定の傾向は可能だが、「家族を巻き込む病氣」(岩井晋代)「茨城ダルク代表」で共通する。

キリスト教の風土から早くから親が子の人格分離を促し、自立志向の強い西欧の家族とは異なり、日本では濃密な親子の情愛を美德として、親が子の依存の支え手となる補完関係(「共依存」)を形成する。

この構造が、依存症患者本人の回復の妨げになり、「やめよう」とする動機付けを回避させてしまう。薬物依存の回復には「もつ自分でどうにもならない」として、自分の無力を自覚する「コガホイント」になる。

施設内では、薬物を使用しない「クリーン」を維持できた入寮

者が、家に戻ると使ってしまう反省から、茨城ダルクでは「親離れ・子離れ」の指導に力点を置き、家族ケアに力を入れてきた。

◇ 家庭内に、四半世紀近くも重症のシンナー依存の息子(ビート)を抱え込んだ両親は、よつやくタルクにつな

ダルク

「自分に正直に生きる」

新しい人生を手にした両親

ビートの死が教えるもの—下

産や人間関係をすべて放棄し、自分たちの回復を求めて新たな人生に船出した。

両親は強い決意でビートとの連絡を絶ち、茨城ダルク家族会で四年間、依存症の勉強を続けた。自分たちが成長したことで今回、息子の不慮の死に直面しながらも、動揺は少な

母親(母)は「息子が薬物依存症者になってくれたおかげで、普通の人生では得られない体験や気付きをもらった。今は他人のためではなく、自分たちのために正直に生きる、新しい生き方を手に入れたい」と話す。

父親(父)も「かつて

館での「ダルク葬」と自宅での本葬に、全国からタルクの仲間たちや家族会のメンバー五百五十人近くが集まった。両親は「あの子がこんなに慕われていたなんて」と、改めて驚いた。

岩井代表によれば、ビートには長期のシンナー依存で人格障害の

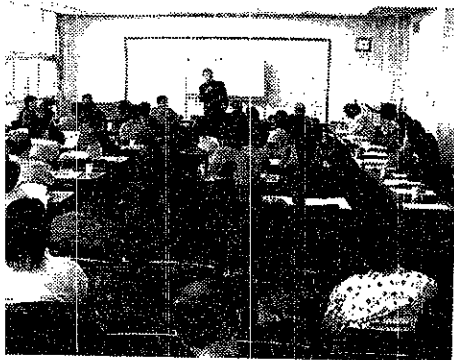
であればあるほど、反面教師として存在価値が高まる逆説的な場所だ。ダルク創始者の近藤恒夫氏の言葉を借りれば、「こうなる。」

「本来、社会全体が一つの鎖なり、その強さは鎖の一番弱い部分で決まる。敗者や弱者に手を貸せる社会が健全で強い社会といえる。現代は家庭、学校、社会、どこにいっても支配と依存のパワーゲーム。せめてダルクの中だけは発想を逆転させたい」

岩井代表は「おれにとつてビートは、いい見本だった。突き放していたって、人は死ぬときは死ぬ、という教訓を残してくれた。家に閉っていたって死ぬが、突き放しても死ぬのが薬物依存者の人生よ」とつぶやいた。

(市毛勝三)

ビートの葬式は、下



毎回100人以上が集まる茨城ダルクの家族。ビートの両親もここで新しい生き方を手にした。大和村の福祉センター「あまびき」